

書評

齋藤毅著
『「人生地理学」からの出発』

岩 木 勇 作

本書では1903(明治36)年に出版された、牧口常三郎著『人生地理学』(文会堂発行・富山房発売)の現代的な意義づけが、地理学・地理教育論を専門とする著者・齋藤毅氏によって語られており、特に現代において牧口の思想を継承・発展させる意義とその方途を、地理教育の「世界像の形成」の視点から述べている。新型コロナウイルスの全世界的な流行によって、人類が新たな枠組みを模索しているなか、『「人生地理学」からの出発』と題する本書が、牧口常三郎生誕150周年記念として出版された意義は大きいだろう。

本書は、2017年1月～2020年3月に『聖教新聞』に掲載された「切手で築こう現代の世界像」、2020年4月～10月に『聖教新聞』に掲載された『「人生地理学」からの出発』を、加筆・再構成したものである。

本書は次の通り、2部で構成されている。

「人生地理学」からの出発

- 第1章 牧口常三郎と「人生地理学」
- 第2章 「人生地理学」の概要
- 第3章 継承・発展させたい研究課題
- 第4章 地理学の考え方と人生
- 第5章 子どもの発達と「地理」
- 第6章 代償行動の一つ、郵便切手の収集
- 第7章 科学的世界観と地理教育
- 第8章 自然美と新しい風景観
- 第9章 多様な世界像の共存と国際理解
- 第10章 「人生地理学」からのメッセージ

切手で築こう現代の世界像

(以下略)

第1部から順をおって内容を見ていこう。第1章では、著者と『人生地理学』との出会い、牧口と地理学の関係について述べられている。『人生地理学』は当時の地理学書としては珍しく「系統地理学」的な手法が取られていること、世界の自然とそれに関わる人間の営みを人生の視点から記したものであることが指摘されている。また『人生地理学』の校閲・批評を担当した高名な地理学者・志賀重昂の『日本風景論』（1894年刊）が当時の日本人の風景観に大転換をもたらしたことに言及している。

第2章では、『人生地理学』の概要が述べられ、現代の我々は、牧口の思想の何を継承・発展させていけばよいのかとの問題提起が行われている。この問題提起を受けて、第3章では、牧口の思想を継承・発展させるための重要な課題として、第1に「トポフィリア」概念と牧口の思想との関係。第2に、長年にわたる教育現場で得られた地理教育の経験を反映した教育諸説、の2つを挙げている。

第4章では、「歴史」や「地理」は暗記科目だと捉えられがちだが、地理学は本来、世界観と直接かかわることから哲学であるとする。私たちがいる世界をどう見るかという「世界観」と世界の姿である「世界像」が個人にとってどのように形成されていくかを第5章～第7章で考察している。

第5章では、子ども時代の独特な見方や考え方（児童世界観）、子どもの空間行動圏の広がり（探検行動）を捉え直した「児童世界像」という著者が提唱した理論を基に、「児童世界観」から「科学的世界観」の橋渡しという学校教育の役割が語られている。また実際の探検行動の代償行動として読書や、世界の郵便切手の収集が紹介されている。

第6章では、代償行動として世界の郵便切手の収集が詳しく述べられているが、この収集が、実は牧口も参考にした内村鑑三の『地人論』（1894年に『地理学考』の書名で刊行され、のちに『地人論』と改められた）において「世界観念を発起」するために効用があると述べられていたことが指摘されている。著者も郵便切手収集の世界像形成の効用について実感しており「現代世界像の形成と郵便切手——その地理教育論の一考察」（『切手の博物館紀要』第6号、切手の博物館、2010年）を著しているが、この世界の郵便切手の収集、分類を通して、科学的認識が進み、世界像が形成されていくという事例を自身の経験を踏まえながら解説し、切手が地理的な情報とともに近現代の世界の歴史を刻み込んだ優れた教材であることを主張している。

この章は第2部の「切手で築こう現代の世界像」にも関連している。先に第2部に簡単に触れておくと、ここでは、世界の郵便切手の図柄からその国や土地の様子、歴史が記述されている。つまり、本章と関連付けて考えるならば、これは単なる各国の紹介ではなく、本書の主題でもある「世界像の形成」を著者の世界の郵便切手の収集という事例を通して提示されているのだといえよう。

第7章では、豊かな世界像を築くための基礎となる地理教育の工夫について述べている。この章では「それにしても、科学的世界観への転換期の最も大切な時機に市役所や町役場の仕事を教えることに、どれほどの意義があるのか、私には分かりかねます」と、やや批判的に「社会科」

が捉えられているが、地理教育が学校教育において十分な役割を果たせていないという著者の長年の主張がうかがえる。

第8章では、第2次世界大戦後に発見された新たな風景美である熱帯・亜熱帯の風景について述べられている。特に亜熱帯の美を日本画家たちの生涯を通して紹介している。

第9章では、多様な世界像の共存について述べている。個々人が形成する世界像は、科学的世界観を共有することで一定の共通性を持つことは事実であるが、一方で、民族・国家・地域によって偏りがあることも事実であるとし、異文化との対話こそ、自分の持つ文化を相対化し、より理解を深め、さらには様々な世界像と共存する国際理解を進めることであると論じている。

第10章では、現代の世界を知り豊かな世界像を築くためには、個々の国や地域について認識してこそ、国と国との関係や地域の結びつきが理解できるという『人生地理学』のメッセージを学び取ることが大事であることを述べている。また牧口の地理教育への貴重な成果を活用するためにも、「社会科」から「地理」と「歴史」を「地理歴史科」として独立させることが先決であると主張している。

本書は、既刊の斎藤毅著『探検教育で子どもが変わる——フィールドワークで築く世界像』（農山漁村文化協会、1996年）、同著『発生的地理教育論——ピアジェ理論の地理教育論的展開』（古今書院、2003年）、前掲「現代世界像の形成と郵便切手——その地理教育論的一考察」などでも披瀝されている「世界像の形成」という著者の重要なテーマによって貫かれている。本書の特色は著者の地理学・地理教育の研究成果、経験を踏まえて、「世界像の形成」という視点から『人生地理学』の現代的意義を導き出していることにある。切手の記述に多くのページが割かれている印象も受けるが、第2部は著者の「世界像の形成」の得難い標本と位置づけることが出来るし、切手収集家としても有名な著者のコレクションが披露された貴重な資料である。特に関連する第1部第6章の切手の収集、分類から「世界像の形成」にいたるプロセスの叙述によって、「世界像の形成」を具体的にイメージすることができるだろう。

著者はあとがきで「人間を取り巻く世界の多様な自然環境や社会の諸形態と諸活動を、とりわけ人生（人間生活）との関わりで地理学的な視点から見つめつつ示された、牧口師の豊かな世界像こそが『人生地理学』。」と述べているが、牧口の世界像そのものである『人生地理学』を現代の我々はどのように受け止め、継承・発展させていくのか、その一つのアプローチを本書は描いている。現代において『人生地理学』を捉え直し、その思想を継承・発展させるための方途を示した好著といえるだろう。

（鳳書院、2021年）